
少年探偵団の恋愛物語

カサキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年探偵団の恋愛物語

【Nコード】

N0134M

【作者名】

カサキ

【あらすじ】

組織が潰れてから数ヶ月後から始まる少年探偵団の恋物語。コナンと哀は元に戻れない。コナンは蘭とは幼なじみのまま。小学二年の5人＋αの恋物語が始まる

第1章・江戸川コナン

俺の名前は江戸川コナン

組織が潰れてから数ヶ月たった今は小学二年になったばかり

ATPX4869のデータは消失してしまった

そのため、俺は工藤新一を捨てて江戸川コナンとして生きていくことを決めた

俺は灰原、歩美、光彦、元太達とこれからも生活していくことになった

しかし、俺は蘭との関係はただの幼なじみだったことに気づいた

俺の恋心が蘭から灰原へと変わっていた事に気づいた

灰原を守っているうちに、好きになっていったのか、分からないが今は灰原以外考えられない

歩美や蘭とは違う女の子のような気がする

明るくもなく、強気な発言ばかりする。だけど、その反面違う意味の弱いところがあるのは蘭や歩美とは違う

俺は灰原の傍にすることが出来るのか分からないが、灰原以外の人とは一緒になりたくない

第1章・江戸川コナン（後書き）

次回は哀編を書きます

これからもよろしくお願いします

第1章・灰原哀

私の名前は灰原哀

組織が潰れてから数ヶ月たった今は小学二年になったばかり

ATPX4869のデータを消失してしまったのよ

そのため、私は宮野志保を捨てて灰原哀として生きていくことを決めたわ

私は江戸川君、吉田さん、円谷君、小嶋君達と、これかれも生活していくことになったわ

私には好きな人がいる。でも、思いを寄せている人がいた

江戸川君で蘭さんだった。でも、彼は蘭さんとの関係を断ってしま

った

これも私のせいだわっと思っただけ、最近の彼は蘭さんに正体が気づかれたのか、たまに蘭さん呼び捨てで呼ぶようになっていたあの子達がいる前で

私は彼と一緒に生きていけるのか？

彼のそばにいてもいいの？

彼以外の人は一緒になりたくない
彼しか好きになれない

私は”江戸川君と結ばれますように”

第1章・灰原哀（後書き）

次回は歩美編を書きます

これからもよろしくお願いします

第1章・吉田歩美

私の名前は吉田歩美！

歩美は今年、二年生になったばかりだよ！

歩美には好きな人が2人いるよ

1人は江戸川コナン君だよ

コナン君は格好良くて、優しくて冷静沈着だけど、歩美はコナン君が大好き！

でも、円谷光彦君も好きなの。光彦君は幼稚園から好きなの

でも、コナン君に会ってから、歩美の恋心が激しく揺れている

コナン君の方がドキドキする事が多い。けど、コナン君は哀ちゃんが好きみたい

相手が哀ちゃんでも、歩美負けないもん！！

必ず、歩美はコナン君と一緒にになりたい
一緒に生きていきたい
光彦君とも……………

第1章・吉田歩美（後書き）

次回は光彦編を書きます

これからもよろしくお願いします

第1章・円谷光彦

僕の名前は円谷光彦です！

僕は二年生になり、さらに勉強を頑張りたいと思います

でも、僕には気になる人が2人います

2人とも好きです。でも、照れてしまい、なかなか気持ちを言えませんが

一番好きなのは、灰原哀さんです

彼女はとてもクールなのですが、時折見せる可愛い笑顔に惹かれています

でも、灰原さんはいつも、コナン君しか相手にしてくれません

灰原さんはコナン君が好きみたいです

僕はコナン君が相手でも、絶対に負けたくありません

もう1人は吉田歩美ちゃんです
歩美ちゃんは幼稚園の時から好きでした

でも、灰原さんに会ってから、2人の間で心が激しく揺れ動いてしまいました

僕は灰原さんと一緒にいたいんです
振り向いてくれないかもしれません、灰原さんのそばにいさせてくれませんか？

お願いします
灰原さんと一緒に
歩美ちゃんとも…………

第1章・円谷光彦（後書き）

次回は元太編を書きます

これからもよろしくお願いします

第1章・小嶋元太

俺の名前は小嶋元太！

まあ、二年生になっても食欲は変わらないぜ！

俺はみんなに比べて体は大きいけど、コナン達と同じ二年生だ

俺は歩美に食べ過ぎるとブタさんになると言われてショックを受けた

14

俺は歩美が好きだから、ショックを受けた

歩美に嫌われたくないと思った

でも、食べることは辞めることは出来ない

俺は他の子より、腹の調子が違う

他の子でいっぱい食べた量は俺にとってはまだまだ少ないと思う

俺は歩美が好き。でも、コナンしか見ないので、嫉妬しているがコナンにはかなわない

何をして、コナンには負けてしまう

だけど、負けても頑張ることが出来ない、俺は歩美を射止めることは出来ない

だけど、コナンには絶対に負けない

歩美と一緒にいたい
そばに…………

第1章・小嶋元太（後書き）

今回は三角関係（1）を書きます

これからもよろしくお願いします

第2章・三角関係(1)

哀と歩美はコナンが好き

だけど、哀は罪悪感にとらわれていた

歩美は哀にすこし遠慮している

コナンは哀が好き

そんな三人の微妙な関係

コナンは哀しか見てないので歩美が不機嫌になっていた

哀もコナンしか見ていなかった

歩美もコナンしか見ていなかったが、少し心の開きを感じていた

2人の間には入り込めない雰囲気が漂っていた

でも、歩美は頑張って2人の間に入った

哀が一瞬顔色を変えたが、いつもの表情で3人が話をした

コナンの心も少しはかわいい歩美に揺れていたが、哀に惹かれてい
る事には気づいていない

コナンも2人の心の内は決まっていたが、歩美の心はコナンから少
しずつ離れていった

コナン side

俺は哀と歩美の2人が俺のことが好きなような気がしていた
でも、歩美は恋愛対象より可愛い妹のような存在だと気づいた

歩美 side

歩美はコナン君が好きで恋愛対象として見ていたけど、なんか、憧れの兄みたいな感じだと、気づきはじめてた
だけど、まだ対象として見ていることには変わらないもん！

哀 side

私は江戸川君が好きで恋愛対象として始めてみた男の子
彼には守ってもらおうようになってから、好きだと気づいた

3人の関係はどうなるのか……

第2章・三角関係(1) (後書き)

次回は三角関係(2)を書きます

これからもよろしくお願いします

第2章・三角関係(2)

光彦と元太は歩美のことが好き

3人とも、幼稚園からの友達で歩美のことが好きな光彦と元太

歩美は光彦のことが幼稚園から好き

しかし、コナンに会ってから歩美は光彦からコナンへ恋心が変わった

でも、コナンに相手にされないの、光彦のことが好きだと改めて
気づく

光彦は歩美と2人になると、照れてしまう

女の子と2人になると、照れてしまうことが、よくある

元太は歩美の表情で顔を赤くしてしまう

歩美とはあまりいい雰囲気になったことがない

光彦
s i d e

僕は歩美ちゃんのことが誰よりも好きです

元太君よりも好きです

絶対に元太君には負けません

歩美
s i d e

歩美は光彦君が好きよ？

優しくて、礼儀正しいもん！

元太君はちょっと……

元太 s i d e

俺は歩美が好きだけど、光彦にとられそう

俺も歩美のためなら、やせたい

歩美を見返して、好きになってもらいたい！

3人の関係はどうなるのか………

第2章・三角関係(2) (後書き)

今回は三角関係(3)を書きます

これからもよろしくお願いします

第2章・三角関係(3)

コナンと光彦は哀が好き

コナンは守り続けてきた哀のことがいつの間にか好きになっていた

哀はあまり表情には出さないが、コナンには哀のちょっとした変化が分かることがあった

コナンは哀しかいないと考えていた

心が揺れていても、気持ちは固まりつつある

光彦はキノコ狩りの時に哀に褒めてもらってから、哀の普段見せないかわいい笑顔を見て意識をしてきた

哀のことは見たり、話しかけるだけで照れてしまうほどに好きになっていた

でも、コナン君がしか見ないので、嫉妬している自分がいた

絶対に哀をとろうと光彦は頑張っていた

哀はあまり光彦には接することをしない

コナンとしかしないのは、バレてはいけないことがあるため

哀はコナンが好きだけど、蘭さんへの罪悪感があるが、コナンは蘭は関係ないと言った

コナン side

光彦には灰原は負えない

俺なら、同じ境遇であるので話をしやすい

灰原は渡さない

哀side

工藤君だけしか見たくない

円谷君には悪いけど……

工藤君しか一緒になりたくない

光彦side

灰原さんは必ず、コナン君を選ぶんでしょうか？

いいえ、僕にもまだチャンスはあります

頑張ります

第2章・三角関係(3) (後書き)

次回は両思い(1)を書きます

これからもよろしくお願いします

第2章・両思い（1）

コナンと哀のそれぞれの思いは同じであるが、なかなか伝えられない

2人の距離は一定の距離を保ちながら、生活していた

でも、哀は蘭さんへの罪悪感から自分の思いを封印している

コナンは哀に伝えようとしても、タイミングが悪くてそのままの状態になっていた

2人の思いに1番早く気づいたのは、なんと哀が罪悪感を感じていた蘭であった

蘭はコナンが工藤新一だと薄々感じていたが、その思いは告げずに、コナンと哀の恋の応援をしていた

蘭は博士に思いを話すと、博士は新一と哀には悪いと思いながらも、2人のことを話した

蘭は哀も新一と同じ境遇だったのなら、私が入る隙はないと言って、博士に新一とはずっと幼なじみのままとして、接することを伝えた

博士はそのことを話すことは出来なかった

蘭は2人をくつつけようと頑張るがなかなか、うまくいかない

コナンと哀は自分の気持ちを少しずつ理解しようとしてはいるが、なかなか整理がつかなかった

コナンスide

俺は灰原のことが好き……

でも、どこかで蘭に申し訳ない気があるのかもしれない

俺は灰原のどこを好きになったのだろうか？

どこなのか分からない

もしかしたら……

哀 side

私は工藤君が好き……

やっぱり、彼とは一緒になれないと思う気持ちがどこかにある

蘭さんは私に私の正体と自分の気持ちを伝えに来てくれた

私を責めずに工藤君との恋を応援してくれるみたい

私は工藤君のどこを好きになったのかしら？

どこなのか分からないわ

もしかしたら……

第2章・両思い（1）（後書き）

次回は両思い（2）を書きます

これからもよろしくお願いします

第2章・両思い（2）

光彦と歩美のそれぞれの思いは同じであるが、なかなか伝えられない

光彦と歩美は元太に邪魔されていたことに気づいたことで元太を邪魔者扱いするようになった

光彦と歩美の行動に元太は落ち込んでいた

歩美は最初から光彦が好きだったので、元太はしつこくまとわりつくことに……………

光彦は歩美のことが小さい頃から好きで、よく元太とケンカをしていた

光彦は歩美がコナンを好きを分かったと、諦め気味になったが、哀との両思いがコナンにかかったため、再び、歩美を意識し始めた

2人は思いを近づけようとするが、コナンと哀のことが気になり、なかなか進まない

光彦 side

僕は歩美ちゃんが好き……

だけど、照れくさくてなかなか思いを伝えられない

歩美ちゃんの取り合いをしていた元太君には悪いけど、歩美ちゃんのことを誰よりも好き

僕は歩美ちゃんのどこを好きになったのでしょうか？

どこなのか分からない

もしかしたら……

歩美 side

歩美は光彦君が好き……

でも、元太君には悪いことをしたな…

光彦君のことは誰よりも好きなの

コナン君以外では…

歩美は光彦君のどこを好きになったの？

どこなのか分からないよ？

もしかしたら…

第2章・両思い（2）（後書き）

次回は片思い（1）を書きます

これからもよろしくお願いします

第2章・片思い（1）

歩美はコナン君が好き……

でも、コナン君は歩美をちゃんと見てくれない

どうして？歩美が子供だから？

それでも、コナン君も子供だもん！

でも、コナン君は哀ちゃんとか、喋らないのはどうして？

哀ちゃんもコナン君と話しているときの方が生き生きしているのも、コナン君のことが好きなのかなあ？

哀ちゃんはコナン君が好きなの……

最初に聞いたときには、そんなことはないと言っていたのも、自信がなかったのかなあ？

歩美はコナン君に見てもらえないことが悔しいよ！

光彦君との元太君は見てくれるのに！

でも、歩美の思いはコナン君には伝わらないのかなあ？

コナン君見てよ……歩美泣いちゃうよ？

こんな辛い思いはしたくないもん！

コナン君……歩美は……大好き……だよ……

第2章・片思い（1）（後書き）

次回は片思い（2）を書きます

これからもよろしくお願いします

第2章・片思い(2)

僕は灰原さんが好き……

でも、灰原さんは僕を見ても何ともないように接してきます

だけど、コナン君と話しているときの灰原さんは僕が見た事もないような、かわいい笑顔を見せてます

コナン君も灰原さんと話しているときの表情は僕達と話すよりも明るいです

2人には僕達が入り込めない雰囲気があります

僕が灰原さんを意識し始めた時は灰原さんに話しかけるだけでも、照れてしまいます

それまではそんなことはなかったのですが……

灰原さんへの思いは次第に強くなりましたが、コナン君へのライバル心も強くなりました

でも、コナン君は照れることもなく、灰原さんと喋っていたので、悔しかったです

だけど、悔しい分僕は灰原さんに認めてもらうために、頑張ります

僕は灰原さんと行動する事がありませんが、振り向いてもらえるように頑張ります

僕は……灰原さんが……大好き……です

第2章・片思い(2) (後書き)

次回は片思い(3)を書きます

これからもよろしくお願いします

第2章・片思い(3)

俺は歩美が好き……

でも、光彦が歩美のことが好きなんだよ

歩美も光彦が好きみたいなんだ

俺はどうすればいいんだ？

最近はずっと2人に邪魔者扱いされてるし、コナンと灰原はいつも、2人の世界に入ってるしよ、俺は1人か……

俺って、そんなに邪魔な存在か？

歩美のことは幼稚園から好きなんだけど、光彦やコナンに比べると、俺は頼りないし頭も悪いし……

俺って何のために生きてるんだ？

歩美と光彦に嫌われてるし、コナンと灰原はまったく相手にしてはくれないしよ……

光彦に負けたくない、でも勝てない

俺は……歩美が……大好き……だ

第2章・片思い(3) (後書き)

次回も頑張って書きます

これからもよろしくお願いします

第3章・コナンと歩美

今日は歩美がコナンと一緒に公園に来ていた

歩美はコナンの手を引っ張り、ベンチに座らせた

「歩美ちゃん、俺を呼び出して、どうしたんだ？」

「…うん、ちょっとコナン君と2人で話が出なかったの」

「えっ？ どうして？」

「だって、コナン君は哀ちゃんとか話しないんだもん！」

歩美は少し頬を膨らませて言った

「歩美ちゃん……」

「コナン君は歩美とは喋りたくないの？」

「……………」

「ねえ……コナン君……答えてよ？」

「歩美ちゃん……」

歩美はそう言うのとコナンに抱きついて泣いてしまった

コナンは歩美を落ち着かせるために、優しく抱き締めた

歩美は驚きながら、泣き続けた

「歩美ちゃん、落ち着いたか？」

「うん、ありがとう……コナン君」

「ああ」

「ごめんね、コナン君、急に泣いたりして？」

「気にしなくていいよ」

「ありがとう……コナン君」

歩美はコナンから離れると再び、聞いた

「コナン君は歩美と喋りたくないの？」

「……歩美ちゃん、喋りたいけど、喋れないんだよ！」

「えっ……どうして？」

「光彦や元太が邪魔するんだよ」

「あの2人が……コナン君の邪魔を？」

「ああ、だけど俺はその方があいつらにとっては！ いいんだよ」

「……コナン君」

「歩美ちゃんも灰原と話したいだろう？」

「うん！でも、コナン君といい雰囲気だから、喋れない」

「それと同じだよ」

「そうなの？」

「ああ」

歩美はその後、しばらくは黙り込むとコナンに体を預けてきた
コナンも歩美の体を支えて、眠りについた

コナンもいつの間にか、眠りについていた

しばらくして歩美が起きるとコナンに抱かれていた

歩美は嬉しいような、離してほしいような、複雑な思いになっていた

コナンも起きると、歩美から離れると歩美に声をかけた

「歩美ちゃん、俺はいつも歩美ちゃん達と話せることはない」

「うん……」

「でも、たまになら、話をしてもいいよ？」

「たま……になら？」

「ああ、俺忙しいからね」

「うん……分かった」

歩美は頷くと再びコナンの胸に飛び込んだ
コナンも優しく抱き締めた

その様子を誰にも見られてはいなかった

第3章・コナンと歩美（後書き）

次回も頑張って書きます

これからもよろしくお願いします

第3章・コナンと哀

哀はコナンを博士の家に呼んだ

コナンは早く帰るなり博士の家に行った

「灰原、俺に何か用か？」

「あら、早かったのね」

「ああ、お前が呼ぶからよ」

「私以外が呼んだら、早く来ないのかしら？」

「いや…そうじゃねーけどよ」

「そう」

「で、用は？」

「あなた、吉田さん達と話してあげてないでしょう？」

「えっ!？」

「吉田さんが言ってたわ」

「なんて？」

「コナン君と哀ちゃんは どうして2人の世界にはいるのってね」

「そうか…」

「冷たい反応ね？」

「おまえもな」

2人はそのことについて話をするが、なかなかいい対策が思いつかない

「灰原、2人であいつらに話すしかないかもな」

「ええ、そうみたいね」

「いつ話す？」

「いつでもいいんじゃない？」

「そうだな」

「ええ」

2人は数日後、5人で話してる姿があった

第3章・コナンと哀（後書き）

次回も頑張って書きます

これからもよろしくお願いします

第3章・光彦と哀

光彦に呼び出された哀は面倒くさそうにしていた

光彦は緊張したおもむきでいた

「灰原さん、僕とあまり話をしてくれませんかよね？」

「えっ？」

哀は自分がコナンに言ったのと同じ事を聞かれた

「灰原さんは僕達と喋ってくれないですねって聞いたんですけど？」

「えっ、ええ。あなた達と話すのは疲れるからよ」

「じゃあ、今も僕と話すだけで疲れるんですか？」

「それは違うわ。あなた達3人と話すときよ？」

「そうですか…」

「ええ」

光彦は哀の冷静な対応に驚きながらも、次のことを話した

「コナン君とはなぜ、いつも話してるんですか？」

「そ…それは……」

「灰原さん、もしかして？」

「なによ？」

「なんでもありません」

光彦は哀のきつい視線になにもいえなくなった

「円谷君話はこれで終わりかしら？」

「……はい」

「そう、じゃあ、またね」

「ええ」

光彦は哀に話したいことが言えずに終わってしまった

第3章・光彦と哀（後書き）

次回も頑張って書きます

これからもよろしくお願いします

第3章・光彦と歩美

光彦は歩美を呼び出したが、歩美は不思議そうな表情を浮かべていた

「光彦君、どうしたの？」

「歩美ちゃん、コナン君と灰原さんどう思います？」

「コナン君と哀ちゃん？それがどうしたの？」

「2人の関係どう思います？」

「お似合いだよ！」

「歩美ちゃんは、灰原さんがコナン君の隣にいて妬かないんですか？」

「昔は妬いてたよ！でも、今は諦めて2人の恋の応援してるよ？」

光彦は歩美の以外は言葉に、言い返すのを忘れたように黙り込んでしまった

「でも、歩美ちゃん。諦めるのは早すぎますよ？」

「そうかな？」

「はい。だから、告白してからにしてください」

「うっうん。分かったわ、告白してみるよ！」

「ありがとうございます」

「光彦君も哀ちゃんに告白してよ？」

「えっ!？」

「光彦君、哀ちゃん好きでしょう？だから、してみたら？」

「分かりました。してみます」

2人の話は、告白を促すものになってしまった

第3章・光彦と歩美（後書き）

次回も頑張って書きます

これからもよろしくお願いします

第3章・元太と歩美

歩美は元太に呼び出されたことを忘れていた

すると、元太は歩美に言ってみたが、引き合ってくれなかった

数日後に、歩美が思い出したのか、元太を呼び出した

「元太君、数日前に歩美を呼んでたけど、何のようだったの？」

「歩美のせいで、忘れたじゃねーか！」

「なんで、歩美のせいなの？」

「歩美が悪いんだからな！」

「えー、歩美悪いことした？元太君になにをしたの？」

「……………」

「……………」

しばらくの間、2人の仲は悪くなったため、歩美は泣きながら走っていった

翌日、改めて歩美に元太は呼び出された

「元太君、今でも歩美が悪いの？」

「当たり前じゃねーか！」

「なんでなの？なんで歩美が悪いのよ！」

「俺が歩美を呼んだのに、無視したじゃねーか」

「呼ばれてたけど、たいしたことないと思って……………」

歩美の表情が暗くなったが、元太の怒りの表情は変わらなかった

その数日後、元太を呼び出したが、歩美は暗い表情のままだった

「歩美はコナンと灰原をどう思う？」

「えっ!？」

いきなり、言われたので歩美は驚いていた

「歩美はあの2人似合うと思う？」

「……うん、似合うよ？お互いにクールだけど、内心緊張してるよ」

「そうか……俺は無理か……」

最後を小さく呟いた

歩美は元太の言いたかったことが分かり、内心安心したが関係は気
まずいまま………

第3章・元太と歩美（後書き）

次回はデート編を書きます

これからもよろしくお願いします

第4章・デート（1）

歩美は数日前にコナンをデートに誘った

デート当日の朝、歩美はコナンの家に向かった

その頃、コナンは待ち合わせ場所にいた

探偵事務所に行き、歩美はコナンがいるか聞いたら、蘭に「コナン君なら、10分前に出掛けたわよ」と言われて、歩美は慌てて待ち合わせ場所に向かった

すると、待ち合わせ場所に居たコナンから声が掛かった

「歩美ちゃん、どうしたの？慌てて来て？」

「コナン君、歩美はコナン君がまだ起きてないと思って探偵事務所に行ったのよ？」

「そうなのか？悪いことしたな……」

「ホントよ！今日はコナン君にたくさん買って貰うからね」

歩美は悪戯っぽく舌を出して、微笑んだ

コナンはそれに対して、苦笑していた

コナンと歩美は時間になったので、街を歩き始めた

「歩美ちゃん、どこに行きたい？」

「歩美はね、最初、ショッピングしたい！」

「なら、杯戸ショッピングモールに行かない？」

「いいよ！でも、電車代はコナン君が払ってね！」

「わぁーたよ」

2人は米花駅に行き、南杯戸駅行きの切符を買った

南杯戸駅に着くと、歩美はコナンの手を握り、走り出した
コナンは歩美の行動に驚いたが、黙ってついていった

ショッピングモールの中に入ると歩美はかわいい小物売場にいた

コナンは歩美の後ろについていった

「コナン君、これどう？」

「いいんじゃないか！歩美ちゃんに似合うと思うよ」

「ホントに？似合う？」

「ああ」

「ありがとう、コナン君」

その後、コナンは歩美にたくさん小物を買わされた

時間は昼になったため、2人は近くの店で昼食を取った

その後、再びショッピングモールに入り、コナンは歩美に振り返られた

2人は買い物を終えると、米花駅行きの電車に乗り帰って行った

月曜日に歩美からコナンに手紙を渡された

内容はデート当日のことと謝罪の言葉があったが、コナンは特に気にしてなかった

第4章・デート（1）（後書き）

次回はデート（2）を書きます

これからもよろしくお願いします

第4章・デート（2）

哀はコナンをデートに誘うことが出来て嬉しかった

哀は、コナンのためにデートプランを計画していた

哀はコナンと2人で近くの公園にいた

「江戸川君、今日はどこかに出掛けましょう？」

「ああ、それでどこに行くんだ？」

「あなたの読みたがっていた、本が売ってたわ」

「本買いに行こうぜ！」

「ちょっと、待ちなさい。急がなくても大丈夫よ」

「そうか」

「ええ」

コナンと哀はしばらくして、公園を出てショッピングセンターに向かった

中に入ると、2人はすぐに本屋に向かった
コナンはすぐに新刊の小説の場所に行った

「灰原、これか言っていた新しい推理小説は？」

「ええ、そうよ。欲しかったんでしよう？」

「ああ、サンキューな灰原」

「それぐらい気にしてないわ」

コナンはさっそく、新刊の推理小説を買った

「灰原、次はどこに行くんだ？」

「そうね、映画観に行きましよう」

「映画？なにを観るんだ？」

「内容は内緒よ」

（言える訳ないじゃない。恋愛物だって、言ったらからかわれるだけだわ）

映画館に着くと中に入り、チケットを渡し席に着いた

映画が始まると、コナンはすでに寝ていた

哀は予想していたことなので特に気にしてなかった

映画が終わるとコナンが目覚まし、哀に寝ていたと言われて、謝ったが予想していたことなので気にしてないとコナンに言った

その後、2人は昼食を取り、午後は買い物を楽しんだ

帰り道に2人は話すこともなく歩いていた

突然、コナンが口を開いた

「灰原、今日はありがとうな」

「ええ、楽しんでもらえてよかったわ」

「灰原もかわいいかったからな」

「……なっ……………／／」

コナンはそれを言うと探偵事務所へ帰って行った
哀はその場で頬を染めていたが、すぐに博士の家に入った

第4章・デート（2）（後書き）

次回はデート（3）を書きます

これからもよろしくお願いします

第4章・デート（3）

光彦は哀をデートに誘うのに、かなり苦勞した

光彦は哀のためにプランを計画していたが当日に緊張してしまい、忘れてしまうことを知らないでいた

デート当日の朝、光彦は哀を迎えに博士の家の前にいた
チャイムを鳴らすと、ドアが開き博士が出てきた

「光彦君、どうしたんじゃ？ 早くに」

「あの、灰原さんはいますか？」

「哀君か、今まだ朝食中じゃ。哀君にようかね？」

「はい、今日出掛ける約束をしていたので」

「ちょっと待っとなれ」

「はい」

しばらくすると哀が姿を現した

哀の姿を見ると、光彦は頬を赤く染めていた

「円谷君顔赤いわよ？」

「気のせいですよ／＼」

「そう」

2人は並んで、歩き始めた

「円谷君、今日はどこに連れて行ってくれるの？」

「えーと……今日は……」

「もしかして、忘れたの？」

「はい、すみません」

光彦は哀に言われて、すぐに謝った

「円谷君、あなたは普段は計画的に出来るのに、女の子と2人になると、冷静さを失うのね」

「すみません」

「まあ、いいわ。ショッピングセンターに行きましょう」

「はい…」

（僕としたことが、灰原さんに引っ張られています。なんとか、僕の印象を良くしないとイケないです）

ショッピングセンターに行くと哀は買い物をはじめた

光彦はただ、哀について行くだけだった

その後もそんな状態が続いた

帰り道に光彦は哀とのデートを失敗してしまった

哀は帰り道で心の中で光彦とコナンではかなり違うと思った

第4章・デート（3）（後書き）

次回はデート（4）を書きます

これからもよろしくお願いします

第4章・デート（4）

歩美は光彦をデートに誘うと喜んで受け入れてくれた

歩美は光彦のためにプランを用意していた

デート当日の朝、2人は待ち合わせ時間より早くきていた

光彦は早くも歩美の姿に頬を染めていた

「光彦君、仮面ヤイバーの映画観に行かない？」

「行きたいです！」

「仮面ヤイバーを観に行こう」

「はい！」

光彦と歩美は映画館に向かって歩いた

映画館に着くと、30分後に映画が始まる前だった

2人はすぐにチケットを渡し、中へ入った

光彦と歩美は隣同士に座るとまた、光彦の頬を染めていた

「光彦君、仮面ヤイバー好き？」

「はい、大好きですよ！僕達のヒーローですから」

「そうだよね！楽しみだね」

「はい、楽しみです」

映画が始まると、2人は声を上げたかったが、抑えながらみていた

映画が終わると2人は次にある場所に向かった

けど、そこには元太の姿が見えたため、引き返して、昼食を近くのレストランで取った

その後、2人はショッピングを楽しんだ

帰り道に歩美が光彦に聞いた

「光彦君、今日楽しかった？」

「はい、楽しかったです」

「良かった！光彦君に喜んでもらって」

「歩美ちゃんと2人で過ごせて、僕も嬉しかったです」

「じゃあ、またね」

「はい、また」

2人は家に向かって帰って行った

第4章・デート（4）（後書き）

次回はデート○を書きます

これからもよろしくお願いします

第4章・デート(5)

元太は歩美をなんとかデートに誘うことが出来た

元太は歩美のために頑張って計画した

デート当日の朝、歩美は元太を迎えに来ていた

「おはよう、元太君、迎えに来たよ!」

「歩美、ちょっと待ってくれ」

「分かった」

しばらくして、元太が出てきた

「おはよう、歩美、今日はどこに行きたい?」

「歩美はね、ショッピングセンターに行きたい」

「じゃあ、そこに行くか」

「ホント元太君?」

「おう! いいぜ!」

元太と歩美は米花町ショッピングセンターに向かって歩き始めた

元太は歩美に見取れていた

ショッピングセンターに着くと、歩美は元太の手を引いて小物売場に走っていった

「ねえ、元太君、これ歩美に似合うと思う？」

「歩美に似合うぜ！」

「ホント？」

「おう！」

「ありがとう、元太君」

元太は歩美に言われて少し頬を染めた

昼になったため、ショッピングセンターにある店で昼食を取った
その後、再びセンター内を歩き始めた

歩美は元太にたくさんのお買い物を買わせていた
元太は女の子の買い物の恐ろしさを初めて知った
帰り道に歩美が口を開いた

「元太君、今日はありがとうね！」

「おう、歩美が楽しんでもくれたなら、良かったぜ！」

「うん、楽しかったよ！じゃあ、またね」

「おう、またな」

2人は家に帰って行った

第4章・デート(5) (後書き)

次回は告白(1)・失恋(1)を書きます

これからもよろしくお願いします

第5章・告白(1)・失恋(1)

歩美は今日の放課後にコナンに告白をしようと決めていた

歩美は朝家を出て、光彦と元太と一緒にコナンと哀を迎えの交差点に行った

5人で学校に向かった

学校に着いてから歩美の様子の変化に哀は気づいていた

「吉田さん、どうしたの？」

「えっ？あ、哀ちゃん……」

「いつもの元気がないわね？」

「うん、緊張してるの？」

「江戸川君への告白？」

「えっ！？なんで哀ちゃん分かったの？」

歩美はどうして哀に今日コナンへ告白するのかが分かったのか分からないに驚いていた

「いつもの様子と違うし、江戸川君を今日はあまり見てないでしょ？」

「うん、なんか恥ずかしくて見れない」

「だから、分かったのよ」

「そうか」

歩美は哀の言葉に納得してしまった

その後、放課後になると歩美はコナンを呼び出した

コナンは何だと言うような表情を見せていた

ここで、歩美の表情が険しくなるとコナンは驚いた

「コナン君、大事な話があるの」

「なんだ？大事な話って？」

「コナン君に歩美の気持ちを伝えるの？」

「えっ？歩美ちゃんの気持ち？」

歩美の言葉にコナンは驚いた

「歩美はね、コナン君のことが、転校してきた時から好きだったの」

「……………」

「でも、コナン君は歩美を見てくれなかったわ」

「……………」

「哀ちゃんが来てからは哀ちゃんしか見ないし、話さないし……………」

「……………」

「歩美はコナン君にとってどんな存在なの？」

「……………」

コナンは黙って歩美の言葉を聞いていた

「でも、歩美はコナン君が好きだよ」

「歩美ちゃん、ごめん。気持ちには応えられない」

「やっぱり、他に好きな人居るの？」

「ああ、いるよ」

「それって、哀ちゃん？」

「かもな……」

「そうか、頑張ってるね」

「歩美も頑張るな」

「うん、ありがとうコナン君」

歩美はそう言うのと、涙を流しながら走って帰って行った

（歩美の初恋は終わった。でも、いつからか分からないけど、光彦君も好き、必ず立ち直るわ）

歩美の初告白は失恋で終わってしまった

第5章・告白(1)・失恋(1)(後書き)

次回は告白(2)・失恋(2)を書きます

これからもよろしくお願いします

第5章・告白(2)・失恋(2)

光彦は今日の放課後に哀に告白をしようと決めていた

光彦は朝家を出て、歩美と元太と一緒にコナンと哀を迎えの交差点に行った

5人で学校に向かった

学校で光彦の様子の変化にコナンが気づいた

「光彦、どうしたんだ？」

「えっ……コ、コナン君」

「緊張してないか？」

「どうして分かるんですか？」

「分かるよ。いつもより口数少ないし、灰原が向くとすぐに逸らすし」

「そうですか？様子へんですか？」

「ああ、やっぱり灰原に告白しようとしてるんだろう？」

「えっ！？どうして分かったんですか？」

「さっきの反応を見れば、分かるよ」

「そうですか……」

光彦はコナンの鋭い読みに驚きながらも、告白の言葉を考えていた

放課後になると、光彦は哀を呼び出した

哀は何なのかしらというような表情を浮かべていた

ここで光彦の表情が険しくなると哀は驚いた

「灰原さん、大事な話があるんです」

「あら、大事な話ってなにかしら？」

「灰原さんに僕の気持ちを伝えるためです」

「えっ！？ 円谷君の気持ち？」

光彦の言葉に哀は驚いた

「僕は、灰原さんのことがキノコ狩りの時から好きでした」

「……………」

「でも、灰原さんは転校してきた時からコナン君しか見てませんでした」

「……………」

「僕達に灰原さんから話しかけてくれませんでしたよね？」

「……………」

「でも、なぜコナン君にだけは灰原さんから話しかけたりするんですか？」

「……………」

「僕達のことはどうでも良い存在なんですか？」

「……………」

哀は黙って光彦の言葉を聞いていた

「でも、僕はそんな灰原さんでも好きです」

「円谷君、ごめんなさい。気持ちには応えられないわ」

「やっぱり、好きな人がいるんですか？」

「ええ、いるわ」

「それって、コナン君ですか？」

「かもね……」

「そうですか、頑張ってください」

「円谷君も頑張ってね」

「はい、ありがとうございます灰原さん」

光彦はそう言っていると、涙をこらえきれずに流してしまいながら走って帰って行った

（僕の恋は終わりました。でも、前から好きな歩美ちゃんがいるので。必ず立ち直ります）

光彦の初告白は失恋で終わってしまった

第5章・告白(2)・失恋(2)(後書き)

次回は告白(3)・失恋(3)を書きます

これからもよろしくお願いします

第5章・告白(3)・失恋(3)

元太は今日の放課後に歩美に告白をしようと決めていた

元太は朝家を出て、光彦と歩美と一緒にコナンと哀を迎えの交差点に行った

5人で学校に向かった

元太の様子に誰も気づかなかった

(どうしよう、今日歩美に告白出来るかな?でも、誰も俺が告白するわけないと思ってるんだろうな。でも、俺も男なら好きな子に告白ぐらいはするよ!)

その様子でコナンが気づいた

「元太、なにガッツポーズしてんだ?」

「えっ?」

「だから、なんでガッツポーズしてんだって聞いてんだよ」

「いや、今日の給食俺の好物だなと思ったら、つい」

「また、給食のことですか、元太君」

「わりーかよ」

元太以外の4人は苦笑する人がいたり、笑う人がいた

放課後になると元太は歩美を呼び出した

歩美は何かな？というような表情を浮かべていた

ここで元太の表情が険しくなると歩美は驚いた

「歩美、今日大事な話があるんだ」

「大事な話？」

「俺の歩美への気持ちを伝えたくてな」

「えっ！？元太君の歩美への気持ち？」

歩美は元太の言葉に驚いていた

「俺は歩美のことが幼稚園の頃から好きなんだ」

「……………」

「でも、歩美は光彦とコナンしかみない」

「……………」

「特にコナンしか頭がない感じだった」

「……………」

「俺は光彦やコナンに比べて、良いところはないけど」

「……………」

元太の言葉を歩美は黙って聞いていた

「歩美のことは光彦に負けないぐらい好きなんだ」

「元太君、ごめんね。気持ちには応えられない」

「やっぱり、好きな人居るのか？」

「うん、いるよ」

「光彦とコナンどっちなんだ？」

「光彦君よ。コナン君には哀ちゃんがいるから」

「そうか…頑張れよ」

「元太君も頑張ってるね」

「おう」

元太は涙をこらえながら走って帰って行った

走って帰る途中で涙が流れてしまっていた

（俺の初恋は終わってしまった。でも、俺にも恋のチャンスは必ず来る！）

元太の初告白は失恋で終わってしまった

第5章・告白(3)・失恋(3)(後書き)

次回は告白(4)を書きます

これからもよろしくお願いします

第5章・告白（4）

哀は光彦の告白を断った

やはり、コナンへの気持ちが強かった

哀はコナンへの告白を今日しようとしていた

（今日は工藤君（江戸川君）に私の気持ちを伝えるわ。彼は蘭さんとは関係ないと言っていたしね。私の初恋が実るかどうかが、今日決まるわ）

哀は心の中で思っていた

哀はコナンやあの三人と学校に行った

いつものように過ごしていた

哀とコナンは学校では関係ない本をずっと読んでいた

放課後になると哀はコナンやあの三人と一緒に帰った後、2人になった時に哀から博士の家に来て欲しいと言った

コナンは哀の言葉に頷き、博士の家に来た

今は博士は今日の朝から明日の夜まで博士の会合に出掛けていた

哀とコナンは立ったままで居ると哀が口を開いた

「工藤君、私あなたのことが好き」

「えっ？今なんて」

「工藤君のことが好きなの」

「灰原……」

「私は工藤君に初めて会った時から好きだったわ」

「俺もいつの間にか、灰原のことが気になってた」

「あなたには守られてばかりだったわ。でも、私は戦うことも密かにしてきた。けど、工藤君の力なしでは何にもならなかったわ」

「俺は灰原を守っていくうちに初めて、守らなければならぬ人だと思った。でも、その頃はまだ蘭への想いがあった」

お互いの思いを語り始めた

「だから、私はあなたへの思いを封印してきたわ。ある日、あなたから蘭さんとは関係ないと言われたときに改めて秘めていた思いが爆発したわ」

「そう言う前にはもう灰原のことが好きだった」

哀はコナンの言葉を聞き返した

「えっ？私のこと好きなの？」

「ああ、好きだよ灰原」

「私もよ」

哀はコナンに抱き付いた

コナンは哀を優しく抱き締めた

2人はそのままの状態で唇を重ねた
お互いに顔を赤くしていた

（私の初恋が叶ったわ。工藤君も私と同じ気持ちだったなんて）
哀は心の中で思った

哀の初告白は実って哀とコナンは恋人同士になった

第5章・告白(4) (後書き)

次回は告白○を書きます

これからもよろしくお願いします

第5章・告白(5)

光彦は哀に告白をしてから、一週間後、今度は歩美に告白しようと思っていた

(今日こそ、歩美ちゃんへ僕の気持ちを伝えます。初恋が叶いますように願います)

光彦は4人と学校へ行った

学校ではいつものように光彦は歩美と元太と3人で遊んでいた
コナンと哀はすでに2人の世界に入っていた

放課後になると光彦は歩美を公園に呼び出した
人気の少ない公園に呼ばれた歩美は少し緊張していた

「歩美ちゃん、僕は歩美ちゃんのことが好きです」
「えっ……光彦君。今なんて言ったの？」

歩美は光彦の言葉に驚いていた

「僕は歩美ちゃんのことを幼稚園の頃から好きなんです」

「光彦君、歩美も光彦君のこと好きだよ」

「でも、一番好きなのはコナン君ですよね？」

「違うよ！光彦君が一番だよ！コナン君にはもう付き合ってる人居るもん！」

「えっ？僕が一番ですか？それにコナン君誰と付き合ってるんですか？」

光彦は歩美の言葉に驚いた

まさか、自分が一番だとは思わなかった

「うん！哀ちゃんとだよ！」

「えっ……はい……ばら……さんと？」

「うん！歩美はあの2人はお似合いだと思うよ」

「確かに、お似合いですね。でも、本当に付き合ってるんですか？」

「うん！哀ちゃんとコナン君の行動が最近怪しかったから」

「最近、妙に2人で居るときは手を繋いでいましたね」

「うん！だから、歩美は光彦君が好きってことが分かったの」

歩美は笑顔を向けると光彦も頬を赤くしながらも微笑んでいた

（やりました。歩美ちゃんも僕と同じ気持ちだと言うことが分かりました。これからは歩美ちゃんをしっかり守っていきます）

光彦の初恋は歩美と恋人同士になることで、実った

第5章・告白(5) (後書き)

次回は友達としてを書きます

これからもよろしくお願いします

第5章・友達として

歩美 side

歩美は勇気を振り絞って、大好きなコナン君に告白したよ!!

でも、見事に振られちゃった……

コナン君はやっぱ、哀ちゃんが好きだったみたい

歩美が哀ちゃんに勝てるはずがないよ……

哀ちゃんは私の知らないコナン君を知ってるもん!

だけど、歩美はコナン君のことしか考えられなかったよ?

他のことは頭に入らないぐらい、コナン君が好きだったの

でも、歩美はいつの間にか、光彦君にも恋愛感情が芽ばえたの

だから、気持ちを整理してコナン君に告白したけど、振られたの……

だから、これからもコナン君とは友達として居られますように……

光彦 side

僕は勇気を出して、好きな灰原さんに告白をしました

でも、見事に振られてしまいました……

やっぱり、灰原さんはコナン君が好きだったみたいです

僕がコナン君に勝てるはずがありません……

コナン君は僕の知らない灰原さんを知ってるんですよ！

だけど、僕は灰原さんのことしか考えられませんでした？

他のことは頭に入ってこないぐらい、灰原さんのことが好きだったのです

でも、僕はいつの間にか、幼稚園から好きだった歩美ちゃんのこと
が再び好きになってしまいました

だから、気持ちを整理して灰原さんに告白したのですが、振られて
しまいました……

だから、これからも灰原さんとは友達として居られますように……

元太 side

俺は勇気を振り絞って、歩美に告白を試してみた

でも、結果は見事に振られてしまった……

やっぱり、歩美は光彦が好きなんだ

俺が光彦に勝てるわけがないよ……

光彦は幼稚園の頃から歩美を知ってる！

俺も知ってるが、光彦と歩美がよく遊んでいたことを覚えている

だけど、俺は歩美のことしか考えられない？

他のことは頭に入らないぐらい、歩美が好きだった

でも、俺はいつの間にか、恋愛感情がなくなっていたのかもしれない

でも、はじめをつけるために歩美に告白したけど、振られた……

だから、これからは歩美とは友達として居られますように……

第5章・友達として（後書き）

次回は恋人デート（1）を書きます

これからもよろしくお願いします

第6章・恋人デート(1)

恋人同士になったコナンと哀は2人で出掛けることにした

哀はコナンとの正式なデートということで、内心嬉しかったが、まだお互いを苗字で呼んでいることに気にかけていた

それはコナンも同じだった

デート当日の朝、哀は普段しないお洒落な格好を試してみた

コナンも同じぐお洒落な格好をしていた

コナンと哀は時間になると待ち合わせ場所に向かった

コナンと哀は待ち合わせ場所に着くと2人とも、固まってしまった

(えっ!?! 工藤君なの? カッコいい……)

(えっ!?! 灰原か? かわいい……)

コナンと哀はお互いの姿を見て思った

「灰原？」

「工藤君……」

「今日はどこに行きたい所ある？」

「工藤君が決めてたんじゃないの？」

「いや、決めてたけど、灰原が行きたい所があれば、そっちを先に
行こうかな？って思ってたよ……」

「そうね、特にはないわ。工藤君の決めてた場所でもいいわ」

「そうか。じゃあ、杯戸ショッピングセンターに行くか？」

「ええ、行きましょう」

2人は米花駅に向かい、南杯戸駅行きの切符を買いに行った
電車に乗り南杯戸駅に着くと2人は杯戸ショッピングセンターに向
かった

ショッピングセンターに着くと2人は一通り周りを歩いた
その後に哀の買い物にコナンも付き合った

哀は小物売り場に行った

コナンは意外そうな表情を浮かべていたが哀は気づいてた

「工藤君、私が小物売り場に行ったら悪い？」

「いや、そうじゃないよ」

「じゃあ、どうゆうこと？」

「灰原も女の子なんだと思ってよ」

「いつ私が男に見える？」

コナンは言葉に詰まってしまった

哀はお構いなしに聞いてきた

「工藤君、小物選び手伝ってくれない？」

「ああ、いいぜ」

「ありがとう…しん…工藤君」

「ん？」

哀は名前で呼ぼうとしたが恥ずかしくて言えなかった

しばらくは2人で話をしながら哀が欲しい小物を選んでいた

会計になると、哀が払おうとしたがコナンが代わりに支払いを済ませた

「工藤君、ありがとう」

「いいよ、あれぐらい」

コナンは哀に微笑みかけると、哀はドキッとしたが、コナンに微笑みを返した

その後、2人は生活に必要な物を買ひ、ショッピングセンターを後にした

2人は米花駅行きの切符を買ひ米花駅に着くと、買った荷物を博士の家に置きに帰った

そうしている間に昼1時前になっていた

「灰原、メシどうする？」

「そうね、近くのレストランに行きましょう」

「じゃあ、行くか？」

「ええ」

2人は近くのレストランに向かった
レストランに入ると、人は少し多く奥にやっと2人分が確保できた
そこに座るとおもむろに注文するものを選んでいた

2人は昼食を済ますと、次に行く場所を決めるため話をしていた

「灰原、次どこに行きたい？」

「工藤君の予定ではどこに行こうとしてたの？」

「まあ、映画館だけど……」

「あら、映画館は私も行きたいと思っていた所よ」

「じゃあ、映画館にするか？」

「ええ、行きましょう」

2人の行く場所が同じだったため、早く決まった

2人は映画館に向かって歩き始めた

（いつ名前で呼べるかしら？ 工藤君のことを新一君って……。それとも、今の姿のコナン君がいいかしら？ 迷うわ）

（いつ名前で呼べばいいんだ？ 灰原のことを哀って……。それとも、本名の志保がいいかな？ 迷うな）

2人は映画館に向かう途中で黙り込むと同じことを考えていた

2人は映画館に着くと、今日上映される映画を観ることにした

2人は映画が始まると、真剣な目でみていた

映画を見終わると、2人は少し疲れが見えてきたので、近くの公園に入った

「灰原、今日はどうだった？」

「そうね、楽しかったわ」

「そうか……」

「ねえ、工藤君……私達恋人同士だよ？／＼」

「ああ、そうだけど？」

「……名前で呼び合わない？／＼」

「灰原……俺も考えていた事だよ」

「えっ？ そうなの？」

「ああ」

哀はコナンが自分と同じことを考えていたことに驚いていた

「私は工藤君のことをなんて呼べばいいのかしら？」

「そうだな、2人の時は新一でいいよ。その他はコナンでいいぜ！」

「分かったわ。私のことも2人の時は志保って呼んで？ それ以外は

哀って呼んでくれるかしら？」

「ああ、いいぜ！」

「ありがとう、新一君」

「こっちこそ、ありがとうな、志保」

2人はようやく、お互いを名前で呼ぶことが出来た

2人は自分の居候している家に帰って行った

第6章・恋人デート(1) (後書き)

次回は恋人デート(2)を書きます

これからもよろしくお願いします

第6章・恋人デート(2) (前書き)

歩美と光彦はデート当日のこと忘れてしまいます

果たして、2人は思い出せるのか？

第6章・恋人デート(2)

恋人同士になった光彦と歩美は恋人としての初めてのデートは今日
することになった

(今度の土曜は光彦君と恋人同士になって初めてのデートよ! 楽し
みだなあ!)

(今度の土曜は歩美ちゃんと恋人同士になって初めてのデートです。
これから楽しみです!)

2人はデートの日を楽しみにしていた

しかし、2人は今日の大切な日を忘れていた

歩美は母親と買い物に行き、光彦も母親と買い物に出掛けていた

歩美は母親と一緒に米花ショッピングセンターに向かって歩いてる
中で、少し考えていた

(今日はお母さんと買い物に行く予定なんだけど、なにか大切な事
忘れているような……?)

その頃、光彦も母親と一緒に米花ショッピングセンターに向かって

歩いてる中で、少し考えていた

（今日はお母様と買い物に行く予定なんですが、なにか大切な事を忘れてしまっているような……？）

2人は今日は何の日かを一生懸命思いだそうとしていた

一足先に歩美が米花ショッピングセンターに着いた

歩美は買い物しながら、思いだそうとしていたが思いだせない

歩美達に遅れること20分後に光彦も米花ショッピングセンターに着いた

光彦も買い物しながら、思いだそうとしていたが思いだせない

その頃、コナンと哀も米花ショッピングセンターにいたが、2人は別行動をしていた

歩美が歩いていると、前に見覚えのある姿を見た
（もしかして、あれコナン君……？ あっ、やっぱりコナン君だ！）

「コナンくん!」

「ん? 歩美ちゃん!」

コナンは突然、元気な歩美の声がしたので、驚いていた

「コナン君、今日は1人なの?」

「いや、哀と一緒にだよ」

「えっ? コナン君、哀ちゃんと名前呼び合ってるの?」

「ああ、付き合ってたんだから、苗字じゃおかしいだろ?」

「うん! なら、哀ちゃんはコナン君のことコナンって呼んでるの?」

「いや、歩美ちゃんと同じだよ」

「そっか」

コナンは歩美がなぜ、光彦と居ないのか気になった

「なあ、歩美ちゃん。今日は光彦とデートじゃなかったのか?」

「えっ? 光彦君と…デート?」

「ああ、今日って言ってなかったか?」

「あゝ、ほんとだあゝ。どうしよう? 光彦君怒ってるかな?」

「さあな、俺には分かんよ」

「……………」

歩美はやっと今日が大事なデートの日だということを思い出した

その頃、光彦は歩いていると、前に見覚えのある姿を見た

(もしかして、あれ灰原さん……? あっやっぱり灰原さんだ!)

「灰原さん！」

「円谷：君」

哀は突然、聞き慣れた光彦の声がしたので、驚いていた

「灰原さん、今日は1人なんですか？」

「違うわ。コナン君と一緒によ」

「えっ？ 灰原さん、コナン君と名前で呼び合ってるんですか？」

「ええ、付き合ってるんだから、苗字じゃおかしいでしょう？」

「はい！ それなら、コナン君は灰原さんのことを哀ちゃんって呼んでるんですか？」

「いいえ、哀って呼んでるわ」

「そうですか」

哀は光彦がなぜ、歩美と居ないのか気になった

「ねえ、円谷君。今日は吉田さんとデートじゃなかったの？」

「えっ？ 歩美ちゃんと…デート？」

「ええ、今日って言ってなかったかしら？」

「あゝ、ほんとでした。どうしよう？ 歩美ちゃん怒ってますかね？」

「さあ、私には分からないわ」

「……………」

光彦もやっと今日が大事なデートの日だということを思い出した

光彦と歩美は親との帰りの時に出会っていた

2人は今日は親が許してくれないので、改めて行うことにした

2人にとって今日は、最悪な日になってしまった

一週間後、歩美と光彦は恋人同士になって初めてのデートを楽しく過ごした

第6章・恋人デート(2) (後書き)

次回も頑張って書きます

これからもよろしくお願いします

第7章・元太の恋

俺は小嶋元太だ

俺が入っている少年探偵団の人は全員付き合うことになった

コナンは灰原と歩美は光彦とお互いに好きで付き合い始めた

俺は歩美に告白したが、振られてしまった

けど、最近新たに気になり始めた子ができた

その子は、コナンや灰原と同じで転校してきた子だったみたいだ

俺はその日に休んでしまったため、知らなかったが

でも、最近俺はその子を見るとドキドキしてしまう

それまでは歩美だったのに……

その子は東尾マリアという関西弁を話す子

最近では、歩美や灰原やコナンとよく話している

その話している顔が俺は好きになっていた

もしかして、新たな恋なのか？

俺が歩美以外に恋心を抱くことがあるのか？

でも、俺は東尾マリアに恋心を抱いていることは事実

今は夏休みに入ったばかりだけど、俺は東尾マリアのことを毎日考えていた

俺に新たな恋が来るのかは相手次第だが……

第7章・元太の恋（後書き）

次回はマリアの恋を書きます

これからもよろしくお願いします

第7章・マリアの恋

ウチは東尾マリアや！

ウチは灰原さんと江戸川君のすごさにいつも驚かされてんや

2人は冷静沈着で大人びた雰囲気を漂わせている

ウチの一番の仲良しは、少年探偵団の1人の吉田歩美ちゃん

彼女は誰にでも、明るく接してくれる優しくてかわいい女の子なんや

今までは江戸川君に惹かれていたんや

けど、最近は同じ少年探偵団の1人の男の子が気になり始めたんや

その子は同じ2年生なんやけど、体格がそれ以上に見えるや

でも、ウチと同じ2年生なんやで

その子は小嶋元太君って名前なんや

ウチは小嶋君の外見と内面のギャップに惹かれたんやで

もしかしたら、ウチの初恋ではないんやけど、2度目の恋かもしれんや

この恋が叶うかは相手次第なんやけど……

第7章・マリアの恋（後書き）

今回は元太の変化を書きます

これからもよろしくお願いします

第7章・元太の変化

俺は今までは歩美が好きだった

歩美一筋のはずだった

歩美は光彦に取られてしまった

歩美しか俺は見るができなかった

けど、少年探偵団にいた灰原を見るようになった

けど、灰原はコナンしか見ていなかった

俺は次に見たのが、恋の予感もある東尾マリアだった

彼女を見てみると、他の女の子とは違うところがある

話し方はもちろん、関西弁だけどみんなもう慣れている

俺にしか分からない所があるけど、教えるわけにはいかない

でも、気づいている人も何人かいる

俺は歩美一筋から東尾へと恋心が移っていった

東尾を見ると最近ドキドキしてしまう

俺は歩美への思いを吹っ切ること出来るのか……

第7章・元太の変化（後書き）

次回は元太の決意を書きます

これからもよろしくお願いします

第7章・元太の決意

俺は歩美への思いをいまだに、吹っ切ることができないでいた

俺にとって歩美は可愛い妹みたいな存在だった

でも、歩美がだんだんお姉さんになっていくのがわかった

でも、歩美を近くに感じなくなってきた

つまり、歩美がだんだんお姉さんになるにつれて、歩美がだんだん
遠い存在になり始めていた

俺はそんな中で歩美に告白したが振られてしまった

この失恋をする前から東尾マリアを気にかけていた

俺は東尾の人柄に惚れていたことに気づいたら、歩美への思いを吹

っ切ることが出来始めていた

でも、どこかでまだ歩美への思いが残っていた

ある日の朝、俺は歩美と光彦が2人で歩いているところを見た

しかも、手を繋いでいて歩美が光彦にくっついていた

それを見た俺は歩美はもう、俺の知らない世界に行ってしまったと思った

これを機に俺は歩美への思いを吹っ切ることが出来た

俺はもう東尾への思いだけで全身が震えていた

俺も東尾へ、思いを伝えることにした

俺もコナンと灰原や歩美と光彦みたいになれるかは分からないが東
尾へ告白をすると決めた

叶いますように……………

第7章・元太の決意（後書き）

今回は元太の告白を書きます

これからもよろしく願います

第7章・元太の告白

元太は今日の放課後にマリアに告白をしようと決めていた

元太は朝家を出て、光彦と歩美と一緒にコナンと哀を迎えの交差点に行った

5人で学校に向かった

元太の様子に誰も気づかなかった

（どうしよう、今日東尾に告白出来るかな？でも、誰も俺が告白するわけないと思ってるんだろうな。でも、俺も男なら好きな子に告白ぐらいはするよ！）

その様子に歩美が気づいた

「元太君、なにそわそわしてるの？」

「えっ？」

「だから、なんでそわそわしてるのって聞けるのよ」

「いや、今日はなんか寒気がすると思ったから」

「えっ？、元太君大丈夫？」

「ああ、ちょっと寒いが大丈夫だよ」

「体調悪くなったら、歩美に言ってね！保健室に連れて行ってあげるから」

「ああ、助かるよ。歩美ありがとう」

歩美は元太の体調を気にかけていた

放課後になると元太は東尾を呼び出した

マリアはウチ?というような表情を浮かべていた

ここで元太の表情が険しくなるとマリアは驚いた

「東尾、今日大事な話があるんだ」

「だ、大事な話?」

「俺の東尾への気持ちを伝えたくてな」

「えっ!? 小嶋君のウチへの気持ち?」

マリアは元太の言葉に驚いていた

「俺は東尾のことが二年生になってから気になったんだ」

「……」

「でも、歩美への思いを吹っ切ることが出来なかったんだ」

「……」

「だけど、歩美はもう俺にとっては手の届かない存在になっていたんだ」

「……」

「俺は歩美から東尾へ思いが傾いたんだ」

「……」

元太の言葉をマリアは黙って聞いていた

「俺は東尾のことが好きなんだ」

「えっ? 小嶋君……」

「東尾はどうなんだ？」

「……ウチ」

マリアは顔を赤く染めていた

マリアは内心嬉しかった

「ウ：ウチも小嶋君が好きやねん」

「えっ？ ホントか？ 東尾」

「ホンマやで」

「サンキュー東尾」

「ありがとう小嶋君」

元太はマリアと一緒にすることが出来た

（俺の恋は叶った。でも、さきに東尾と仲良くならないと）

元太の告白は実った：

第7章・元太の告白（後書き）

次回はマリアとの初デートを書きます

これからもよろしくお願いします

第7章・マリアとの初デート

今日は元太とマリアにとっての初デートの日を迎えた
当日の朝9時

この時はまだ元太は寝ていた
マリアはもう出掛ける準備をしていた
待ち合わせ時間まで30分

マリアは今日の日を楽しみにしていた

（ウチ、デート初やろ。ちゃんと出来るだろうか？でも、小嶋君は
どうなんやろう？）

マリアはそんなことを考えながら、待ち合わせ場所に着いた

待ち合わせ時間まであと10分あった

しかし、元太はまだ寝ていた

その10分後、待ち合わせ時間になったが、元太は来ない

その頃元太はやっと起きて、時計の時間を見て驚いた

（ヤベーーーー！もう待ち合わせ時間じゃねーか！東尾怒ってるよな？）

元太はそう思いながら、急いで支度をした

一方マリアは30分待っても、来ないことに焦りを覚えていた

「どうしたんやろう、小嶋君？寝坊かな？」

「もしやったら、怒るしかないやんか！」

マリアは怒りに満ちた表情に変わっていった

その10分後、やっと元太が待ち合わせ場所に来た
しかし、待ち合わせ時間より40分遅刻していた

マリアは怒りに満ちた表情から一変して優しい笑顔を元太に向けた
けど、元太はその笑顔の裏には怒りがあると悟った

「東尾……怒ってる……よな？」

「……………」

「東尾ホントにごめん……」

「……………」

「寝坊してしまったんだ」

「やっぱり……寝坊やったんや……」

「うっ……あっ……ごめん……」

元太は謝るがマリアの機嫌は悪かった

マリアは仕方なく、歩き始めた

元太も慌ててマリアの後を追った

元太は機嫌を直してもらうために、女の子が行く米花ショッピングモールの小物売場行った

しかし、そこにはあの4人の姿があった

マリアは歩美の姿を見つけると駆け寄っていった

「歩美ちゃん！灰原さん！」

「あっ！マリアちゃん！どうしたの？」

「あら、偶然ね？東尾さん」

「マリアちゃん、どうしたんですか？」
「ん？誰だ？」

コナンは誰なのか分からなかった

「もう。コナン君！マリアちゃんだよ、東尾マリアちゃん！」
「そうですよ、コナン君。ちゃんと覚えてあげてくださいよ」
「あなた、すぐに忘れるのね？」
「……うつるせー……」

3人言われたコナンは少し機嫌を損ねた

「あっあの？ウチのこと忘れてへん？」
「「「あっ！」」」

「もう、しっかりしてえな」
「わりい」

「ごめんね」
「すみません」

「ごめんなさい」
4人はとっさに謝った

マリアも気にしないでっていう表情を浮かべていた。

その時、元太は隠れていた

マリアはつい元太の事を忘れていた

話しているうちにコナン達から誰と来たのと言われて、マリアは固まってしまった

「ん？どうした？マリアちゃん」

「どうしたの？マリアちゃん」

「どうしたんですか？マリアちゃん」

「東尾さん？」

マリアはしばらく沈黙のあと口を開いた

「…………ごめんなさい、人待たしてんね」

「そっか、じゃあね？」

「そうでしたか、それじゃあ」

「元太を待たしてんだな？」

「さっき、小嶋君が隠れていたわ」

「「「えっ」」」

3人はコナンと哀の言葉に驚いていた

特にマリアは知られたくなかったことを知られてしまい、さらに驚いていた

「そうなの？マリアちゃん」

「そうなんですか？マリアちゃん」

「…………うん…………でも、小嶋君との初デート中なの。でも、小嶋君寝坊したんや！やから…………」

マリアの言葉を聞いた歩美と光彦は固まってしまった

コナンと哀は何か悟ったのか口を開いた

「だから、元太がこっちにマリアちゃんと来ないわけだ」

「ええ、それに小嶋君はせっかくのデートを自分の寝坊で台無しにしてしまったから、女の子が好きな小物売場に連れてきたのね」

「ところが、俺達と会ってしまったため、マリアちゃんだけが寄っ

てきた」

「それで、小嶋君は自分の過ちを一緒行くと言われそうだとっさに隠れたところかしら」

「江戸川君に灰原さんの言う通りやねん」

マリアは2人の的確な言葉に驚いていた

「……そうだったんだ」

「……そうでしたか」

歩美と光彦はただ感心するしかなかった

その後、コナン達と別れたマリアは元太を探しに行った

元太は非常口の所で座り込んでいた
暗い表情を浮かべていた

マリアは声をかけようとしたが、出来なかった
ので隣に座り込み、
元太の手を握った

元太は驚いたが優しく握り返した

その後、2人は楽しく買い物をして、
昼からは映画を見たり、遊んだりした

帰り道の途中に近くの公園に寄った
もう人気はなかった

2人はベンチに座り込み、1日を振り返った

「歩美ちゃん達と会った後は普通に楽しくデート出来たね？」

「ああ、東尾の機嫌も少しずつ明るくなったしな」

「うん、ウチも小嶋君の表情が明るくなって良かったんやで」

「そうか？明るくなったか」

「うん！」

「そうか」

その後も少し話し、帰ろうと立ったとき、元太はマリアに抱きついた
マリアは元太の行動に驚いた

マリアは抵抗をしなかった

元太のぬくもりを感じていた

その時、元太が呟いた

「東尾、今日の朝は俺のせいでごめん」

「……………」

「ホントは楽しみで早く寝ただけど…」

「……………」

「結局、起きれなかった。でも、早く準備をして出掛けたんだ」

「……………」

「でも、40分も遅刻してしまった。ホントにごめん……………」

「……………」

「次にデ、デートする時には、遅れないように頑張るよ」

「……………」

「だから、今日はホントにごめんなさい……」

今まで黙っていたマリアが口を開いた

「……うん、次は遅れないって、約束してくれるんやろ？」

「ああ」

マリアは元太の腕をどかして、元太の正面に向き直して、抱きついた
元太も優しく抱き締めた

その後、2人は帰って行った

第7章・マリアとの初デート（後書き）

次回は最終章3話を書きます

これからもよろしくお願いします

最終章・10年後

小学2年生で少年探偵団だった5人と東尾マリアの6人は今高校3年生になっていた

あれから10年の月日が流れていた

その間には、歩美と光彦、元太とマリアは中学に上がるとトラブルばかり起こっていた

一時は、双方の異性と仲良くするようになっていた

一方で、コナンと哀は小学4年生の時に博士がフサエさんと結婚してアメリカに行ったため、2人で工藤邸に住み始めた

2人は相変わらず、みんなでいるときは小学から同じようにしていた

2人の時は、哀は普段甘えないが甘えてくる哀をコナンは受け入れていた

コナンもたまに哀に甘える

哀もコナンの行動を受け入れていた

歩美と光彦はお互いに好きなタイプが中学に入り変わってきた

元太とマリアもお互いに好きなタイプが中学に入り変わってきた

歩美のタイプが元太に変わっていた

光彦のタイプがマリアに変わっていた

元太も小学校の頃から好きな歩美に変わっていた

マリアも光彦のような礼儀正しいタイプに変わっていた

コナンと哀は学校でも、2人でいることが多かった
2人の噂は学校内にとどまらず、近くにある中学まで噂は広がって
いた

中学の三年生の秋になるとそれまで仲の悪かった4人が急に仲直り
を始めた

それは些細な事で、文化祭の出し物でコナンと哀を除く4人が主な
登場人物として出ることにになり、コナンと哀はすべての役を断り、
2人は準備に参加するだけで本番は客席から眺めるだけだった

そして、高校生になるとマリアと歩美も一段とモテるようになった
が、既に彼氏持ちのために告白しても振られていた
しかし、中にはしつこい人もいるが、すべてコナンに見つかり、そ
の人は逃げていくしかなかった

一方の哀は相変わらずの人気度とモテ度が高く、中学では週に3日
は告白されていた。1日最高6人が告白してきたがすべて断った
高校に入るとさらに人気度とモテ度が上がり、学校に行くと先輩後
輩関係なく告白された

けど、彼氏持ちのために自分の思いだけを告げる人もいるが、ほと
んどは付き合い前提の告白だったが、すべて断った

しかし、しつこくまとわりつく人もいたが、コナンや元太に見つか
り、仕方なく逃げる人もいた

元太に対しては喧嘩を売ってくるが、簡単に倒されてしまう

告白は毎日のようにされてきた。1日最高10人がしてきたがすべて断った

逆に、元太は告白されることはないが、巨体でありながら運動神経が良いためか、女子の間でも話題になることが合った

光彦は告白されることはあるが、そんなに多くはなかった。礼儀正しい過ぎるとの批判もあったみたいだ
特に後輩から敬語で話されると困るとの苦情や批判が多かったが光彦は変えることはなかった

一方のコナンは小学4年生から告白をされ続けていた。小学校の頃は週に2、3日は告白を受けていたがすべてを断った
小学校の頃は1日最高4人から受けていたが、すべてを断った中にはしつこい人もいたが、なんとか説得して帰らせた

中学に上がるとさらに人気度とモテ度が上がり、告白をされる日にちが増えた。週に4日間は告白をされ続けたがすべてを断った
1日最高8人にされたが、断ることしかしなかった。それでも、なんとか自分の彼にしたいた女子は自分を磨き始めていた
彼女持ちだとしても、その子に負けないように磨いていた

高校に上がると人気度とモテ度はさらに高く上がり、平日休日関係なく毎日出会うと告白をされていた。そのため、休日はよく哀と一緒に出掛けることにしたが、ほんのわずかの間を見つけては告白をされていた

1日最高数十人にされるがすべてを断った
中にはしつこい人もいたが、なんとか説得させた

本日は帝丹高校卒業式が行われた

みんなはそれぞれの道に進むことになった

光彦と歩美は有名大学に進学

元太はスポーツ推薦で大学に進学

マリアも大学に進学

コナンと哀は双方の得意分野と苦手分野が学べる大学に進学した

唯一、元太とマリアは大学が違うがすぐ近くに隣接している

この後は、6人が工藤邸に集まり、卒業祝いを行うことになっている

親達は阿笠邸で話や夕食を食べることになっている

子供達だけでパーティーを工藤邸でする事に一部親は反対していたが、コナンと哀はずっと面倒を見てもらっているので、大丈夫と言う親もいたので結局は賛成した形になった

昼はそれぞれの家で食べた

その後は、博士や工藤夫婦にも手伝ってもらい、飾り付けや料理を作った

料理は子供達用と大人達用を作った

夕方5時になるとみんなが親と共に来た

親達は工藤夫婦と一緒に博士の家に行った

子供達は工藤邸に上がった

歩美達は室内の飾り付けに声を上げた

「わぁー、すごい！哀ちゃんとコナン君が付けたの？」

「スゴいやん！こんな短時間でよう出来てんや」

「相変わらず、すごいですね。お2人さんは」

「飾り付けもすごいけどよ、料理がスゲーうまそうじゃん！」

「元太君！目的が違うでしょう！」

「そうですよ。食べ物ばかり気を取られないでください」

「そうやで、アンタはいつもそうなんやから」

「うっ…………お前ら…………」

元太は3人に言われ、言葉を失った

コナンと哀はその様子を眺めて微笑んでいた

パーティーは第1部～最終部まであり、最終部にコナンと哀からの発表がある

第1部（5時～6時）は学校生活の振り返り

第2部（6時～7時）は食事

第3部（7時～7時30分）は今後の話

最終部（7時30分～8時）は衝撃発表

6人は学校生活を振り返った

体育祭や文化祭などの盛り上がる話から、切ない話までを語り合った

食事では元太の食欲は相変わらず、すぐく5人は呆れていた
作った哀は少し不安になっていた

今後の生活や大学でやりたいことなどを話した

最終部になり、コナンと哀の表情が陰しくなった

4人は驚いた

光彦が2人に聞いた

「コナン君、灰原さん、なにか発表でもあるんですか？」

「ああ、ちょっとした発表をな」

「ええ、出来たら卒業式前にしたかったわ」

「ねえ、コナン君、哀ちゃん。歩美達だけに発表するの？」

「ええ、そうよ」

「な、発表ってなんの発表だ？」

「それを今からするよ」

「それってウチらにとって嬉しいことなん？」

「たぶん」

「そうですか。では、お2人の発表をどうぞ」

「ああ」

口々に言葉を発した

光彦の合図で2人の発表が始まった

「あのさ、俺達……今月末に結婚しようと思うんだ」

「バレンタインデーの時に私がチョコを渡した後にプロポーズを受けたわ」

「俺達はこれからは、2人の力で生きていこうと思うんだ」

「ええ、私達は2人一緒じゃないと乗り越えられないこともあるみたいだわ」

「発表はこれで終わりだ」

「何か聞きたいことあるかしら？」

4人は驚きを隠せずにいた

声も出ないくらいに固まってしまっていた

「あのお2人さん、それは……本当ですか？」

「ほんとなの？哀ちゃん」

「マジか？コナン」

「江戸川君、灰原さん、ホンマなん？」

「ああ、ホントだよ」

「ええ、そうよ」

4人はホントにだと思いきさらに驚いた

そして、口々にお祝いの言葉をした

「おめでとう！コナン君、哀ちゃん！」

「おめでとうございます！コナン君灰原さん」

「おめでとう！コナン、灰原」

「おめでとう！江戸川君、灰原さん」

「ああ、ありがとう」

「みんな、ありがとう」

コナンと哀の発表が終わると、4人は博士の家に行き親と一緒に帰って行った

2人はパーティーの片付けを始めた

2人の結婚式まで3週間あるので、式場や衣装などを2人で選んだ

招待する人の名前書いたり、招待状を作った

いよいよ、結婚式まで3日になった……

最終章・10年後（後書き）

次回も頑張って書きます

これからもよろしくお願いします

最終章・結婚式

歩美達への発表から3週間が過ぎた、今日はコナンと哀の結婚式
コナンと哀の内心は緊張していたが表情は普通だった

結婚式には、少年探偵団の3人と東尾マリアと小五郎と英里、新出
夫婦（智明、蘭）とその子供と京極夫婦（真、園子）その子供、服
部夫婦（平次、和葉）その子供、博士と工藤夫婦、警察関係者など
を呼んだ

コナンと哀はそれぞれの控え室に向かう分かれ道で別れる前に一言、
言った

「哀、またあとでな」

「ええ、コナン。またあとでね」

「ああ、じゃな」

「ええ、またね」

哀はコナンに微笑んでから控え室に向かった
2人はそれぞれの控え室に入っていた

数十分後、ある程度着替えが済んだ頃にノックする音が聞こえた

コンコン

「はい、どうぞ」

哀の控え室に蘭と園子と2人の子供が入ってきた

「蘭さん、園子さん」

「哀ちゃん、おめでどう！」

「哀ちゃん、おめでどう！」

「…ありがとうございます」

「哀お姉さん、おめでどうございます！」

「哀姉ちゃん、おめでどうございます！」

「2人ともありがとう」

「ドレス、綺麗だね」

「に、似合うわね？」

「…ありがとうございます」

蘭と園子と子供達は、時間になったので、出て行った

その頃、コナンの所にも蘭や園子などもやって来た

最後の仕上げが終わった時にドアをノックする音が聞こえた

コンコン

「はい、どうぞ」

コナンの控え室に少年探偵団の3人と東尾マリアが入ってきた

「お前ら、来てくれたんだな」

「うん！それてね、コナン君、結婚おめでどう！」

「コナン君、ご結婚おめでどうございます！」

「コナン、結婚おめでどう！」

「江戸川君、結婚おめでどう！」

「歩美ちゃん、光彦、元太、マリアちゃん…ありがとうございます」

「スーツ姿、かっこいいね？」

「コナン君、似合いますよ？」

「コナン、似合うじゃねーか？」

「江戸川君、かっこいい」

「……そうか？ありがとうな」

少年探偵団とマリアは、時間になったので出て行った

その後に出席者全員がコナンと哀の所に全員が交互にやって来た

2人は、対応をするだけで疲れを見せていたが、本番が近いのでその姿を隠した

全員は会場に行き、席に着いた

博士だけは哀の控え室の前に残っていた

数分後、式は始まり、最初にコナンが入場して、すぐに花嫁の入場が始まった

哀は博士に手を引かれて、コナンの元に来ると、博士はもう泣いていた

「コナン、哀君を頼んだぞ」

「ああ、分かってるよ。必ず哀を幸せにするよ」

博士と一言を交わすと博士はコナンの返事に頷き、自分の席に戻り着いた

コナンは哀の手を引いて、神父の前に行った

神父の声で式の本番が始まった

式は順調に進み、最後の誓いの言葉と指輪交換と誓いのキスのみとなった

『江戸川コナン、あなたは灰原哀を永遠に愛することを誓いますか？』

「はい、誓います」

『灰原哀、あなたは江戸川コナンを永遠に愛することを誓いますか』

「はい、誓います」

そして、指輪交換が行われ、最後に誓いのキスが行われた

2人は向かい合うと唇を重ねた

式が終わり、全員に祝福された

哀はブーケを後ろに向かって投げると、高々と舞い上がったブーケは歩美の手中に収まった

みんなは、歩美に声をかけた

「歩美ちゃん、よかったですね／＼」

「歩美ちゃん、よかったやん！」

「歩美お姉さん、いいな！」

「歩美、次はお前らか」

光彦と和葉と蘭の子供と元太が言った

元太の言葉に歩美と光彦は顔を赤く染めた

それを見ていたコナンと哀は微笑みを浮かべて見ていた

その夜、2人は部屋にいた

コナンと哀は改めて、結婚したことを確認した

「哀、これからもよろしくな？」

「ええ、こちらこそよろしくね」

「哀、今幸せか？」

「ええ、幸せよ、コナン」

コナンと哀は一呼吸置いた

「あなたに、言わなければならないことがあるの」
「えっ!?!」

「私達の赤ちゃん出来たの?」

「えっ? ホントか?」

「ええ、ホントよ」

「やったー!」

コナンは子供のように喜んだ
その姿を哀は微笑みながら見ていた

「で、いつ生まれるんだ?」

「今年の秋頃よ」

「今何ヶ月なんだ?」

「3ヶ月目に入ったところよ」

「だから、最近妙に哀の腹周りが大きくなってたのか」

「ええ、私も具合悪くて病院行ったときに赤ちゃん出来てた知ったのよ」

「だから、あの日以来少し体調面を気にしてたり、何か言うとしても言えなかったのか」

「ええ、さすがね」

コナンと哀は楽しく幸せな生活を祈りながら永遠の愛を誓った

最終章・結婚式（後書き）

次回で完結です

これからもよろしくお願いします

最終章・12年後 6人の姿（前書き）

変な終わり方です

最終章・12年後　6人の姿

コナンと哀の結婚式のあと、哀の妊娠報告が行われて、祝福された

それから、半年後無事に出産した

その子は女の子で名前は”明美”にした

由来は、哀の唯一の身内の姉の名前を貰った

これには、哀も照れ臭そうにしながらも名前を呼んでいた

男女2人ずつ生まれた

コナンと哀の間には4人の子に恵まれた

歩美と光彦は20歳の時に結婚した

男1人女2人が生まれた

歩美と光彦の間には3人の子に恵まれた

元太とマリアは大学卒業と同じ時期に結婚した

男女1人ずつが生まれた

元太とマリアの間には2人の子に恵まれた

6人はそれぞれの道で活躍をしていた

まずは、円谷（旧姓吉田）歩美は大学卒業後ファッションデザイナーナ

1 になった

出だしの頃はなかなかうまくいかなかったが、3年目からは才能を認められ始めた

その2年後には事務所を構えるまでに成長した
妊娠や出産を繰り返しながらも、しっかりと働いていた

次に円谷光彦は大学卒業後に高校教師になった

理科と社会科の免許を取得した

新任の時は2年C組の化学と1年生A組の日本史を担当した

4年目に初めてクラス担任を任された

その後はずっと、クラス担任を任されるようになり、生徒にあつい信頼を得ていた

今年の秋に教頭への昇進試験を受けることにしている

次に小嶋元太は大学卒業後に鰻料理の修行に出掛けた

その2年後には鰻屋に就職した

鰻屋に就職後は自分の腕を見せて、20代後半での独立を認められるようになった

今は鰻屋を経営して2年になる

次に小嶋（旧姓東尾）マリアは大学卒業後に小学校教師になった

小学校の教諭免許を一発で合格した

赴任は母校の帝丹小学校になった

新任から4年目までは1年と2年の副担任を任された

5年目と6年目は5年生の担任を任されて、7年目と今年は6年生の担任を任されるようになった

次に江戸川（旧姓灰原）哀は大学卒業後に薬剤師になることにした
科学者としても、有名で両立をしていた
事務所は兼任で、自宅近くに建てた
その近くに、夫の事務所も建てていた
世界からも注目を集めていた
子育てと仕事を両立している

最後に江戸川コナンは大学卒業後に本格的に探偵業を始めた
事務所も建てて、世界からも依頼がきていた
事務所には事務員が4人とコナンを含めて6人の探偵がいる
探偵達は得意分野で働いていた
日常生活を専門としている探偵もいた
主に事件関係が専門
探偵業は順調に進んでいた
家庭では家事もこなしていた

6人はそれぞれの仕事を順調にこなしていた
自分の店や事務所を構えていた

6人とも自分の道を歩んだり、たまに会っては、仕事や家庭事情を

話していた

6人とも家庭を持ち、苦勞しながら生活をしていた

この物語には……がある

最終章・12年後　6人の姿（後書き）

今まで、ありがとうございました

続編を書けたら、書きます

これからもよろしく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0134m/>

少年探偵団の恋愛物語

2010年10月11日23時14分発行